

# しま 地域だより

8  
月号

サザンクリーンセンター推進協議会



市民の憩いの場、嘉手志川



山顛毛にある他魯毎の墓

## 島尻歴史漫歩

—グスクと宿道—

# 糸満市大里の南山城



南山城は島尻大里城とも呼ばれ、現在はわずかに城郭の石垣などが残されているに過ぎない。三山に分かれていた琉球が尚巴志によって統一されたのは、1429年のことである。佐敷按司だった尚巴志は、島添大里按司を滅ぼした後、中山王武寧を討ち、首里に都を定めて父思紹を王位につけて琉球統一への布石を打つ。1416年、尚巴志は、北山王攀安知を討つていよいよ最後に残ったのは、南山王の他魯毎であった。

他魯毎はかなり権勢を誇った領主だった。南山城の東方には、嘉手志川があり、今日でも豊かな水が市民を癒す。

南山城、嘉手志川、山顛毛など南山ゆかりの史跡を散策し、真夏の草いきれに触れると、かつて権勢を誇っていた他魯毎や家臣達の息づかいが聞こえるようだ。

南山城、嘉手志川、山顛毛など南山ゆかりの史跡を散策し、真夏の草いきれに触れると、かつて権勢を誇っていた他魯毎や家臣達の息づかいが聞こえるようだ。

# 古堅サザン協会長、上原糸満市長に聞く

南部地区のごみ処理施設から排出される焼却灰を処理するため、独自の最終処理施設建設を目指した旧南廃協。候補地を決める段階で、糸満市と他の5市町が意見の相違から平成19年3月に組織は解散した。

平成19年4月、糸満市を除く5市町で発足したサザンクリーンセンター推進協議会（会長・古堅國雄与那原町長）だが、「糸満市の加入を」という住民、議会、部会それぞれの声に答える形で、平成20年7月1日より「南部は一つ」のもと、再び糸満市は協同歩調を取る。3市3町の枠組みでのスタートを前に、サザン協の古堅國雄会長、上原糸満市長にこれまでの総括や今後の課題などを聞いた。

## 古堅國雄サザン協会長 (与那原町長)

### これまでの取り組みについて

平成15年5月から南廃協が立ち上がり、紆余曲折を経て今日に至った。

「雨降って地固まる」―お互い論を尽くし、反省しながらも共に広域行政を推進するところが出来たのはこれまでの取り組みの成果だと言える。

これにより、単にごみ処理施設建設だけでなく、し尿処理施設、葬祭場建設の広域事業化への相乗効果は大きいものがある。「南部は一つ」で合意形成が出来たことは、こ

れら南部振興に係る非常に大きな前進だと考える。

### 短・長期計画の中で、当面の具体的な取り組み

既存施設の問題がある。平成20年3月に基幹改良を終えた東部清掃は今後13年、しつかり活用していく。糸豊施設も向こう13年は稼働を見据えている。島尻は新たに基幹改良になるのか早急な議論が必要であろう。

倉浜衛生施設組合への預託期限が切れる平成23年度以降の残渣処理については、糸

ユールに拘束力を持たせるわけではない。糸豊、東部、島尻とも地域の事情を尊重したい。だが、最終的にサザン協がコーディネーターとしての役割をしっかりと果たして行くことが大切だ。

### サザン協の今後の課題は

#### 機種や候補地選定を含め、地域住民の歓迎する形で推進を図るべきだ。それに対して、建設地の周辺には住民の喜ぶ付帯施設を還元する形にしていきたい。

候補地となる構成市町の首長で

ある理事は、行政と住民の板挟みになる恐れがある。その点はしつかり考慮し、全員の合意が得られるよう徹底した話し合いを行っていきたい。この全会一致の原則は、再三にわたって理事会でも確認されている。



古堅國雄サザン協会長(与那原町長室にて)

# 上原裕常糸満市長

## ごみ・環境問題について

糸満市の環境問題としての長年の課題は、東シナ海にそそぎ込む報得川の清流化であり、報得川は全国ワースト5に名前を連ねる不名誉な記録を持っている。県と流域の3市・1町が手を携えて、畜舎排水

対策、生活排水対策、自然環境の保全等の各種広域的な施策を実施していきたい。一日も早い清流化を望んでいる。

また、広域的な施策として、ごみ問題は南部地域の喫緊の課題である。これまで長い時間と経費を投じて取り組まれてきたが、所期の目的が達成

されていない。



上原裕常市長(市長室にて)

現在は豊見城市と共同でごみ処理を行っているごみ処理、特に焼却施設等の建設・維持・管理運営には莫大な予算が必要であり、今以上に効率的なごみ処理行政を実現するためには、南部地域全体での一元化をぜひ実現したい。

## 倉浜衛生施設組合への 預託期限が切れる 平成23年度以降への対応は

糸豊清掃施設組合の焼却残渣については、平成23年4月以降は預けた残渣を引き取り、独自に処理を行わなければならない。現在、糸豊では平成

23年4月以降に発生する焼却残渣と預託している残渣を処理するため、この4月から糸満市から技術職を派遣し「溶融施設建設事業」に取り組んでいる。この事業は、既設の焼却施設で溶融処理までできるようにするために施設の一部を改良する事業である。今年度中に各種策定業務を実施し、地域協議を行った後に、国への交付金申請を経て平成21年には工事に着手し、現在のスケジュール通りには、平成23年4月には本格的に稼働できる予定である。

投入したごみのほとんどを最終的にリサイクル可能な溶融スラグに変えることになるため、最終処分場のいらぬ施設としての運用をめざしていきたいと考えている。

## サザン協に期待することは

地方分権の進展で今後、国県からの権限委譲等がなされようとしており、市町村における行政事務が拡大しようとしている。

広域行政で行うことが効率的であると判断される業務については、近隣市町村と連携し積極的に進めなければならない。現在サザン協の6市町の中には、東部、島尻、糸豊の3組合があり、それぞれごみ処理について課題を抱えている。将来にわたってそれぞれの課題を解決するためには、組織・施設の一元化が必要であると

考えている。  
一元化を達成するためには、しっかりと議論が必要である。それぞれの地域住民の声をよく聞き、議会、首長の意見を一つにまとめることがサザン協に課された大きな課題である。  
この大きな課題を乗り越え「南部は一つ」となり、広域行政において他の範となる地域になることを期待をしている。

## サザン協理事会開催 議決”全会一致制”へ改正

サザン協の理事会が7月18日、那覇市の自治会館管理組合特別会議室で行われた。

まず、平成20年度サザン協予算報告があり、次に、サザン協会則の一部改正、事務局連絡会運営規定の一部改正について、平成20年度サザン協補正予算について審議された。

サザン協会則の一部改正については、組織の構成について、新たに「糸満市」及び「糸満市・豊見城市清掃施設組合」が盛り込まれること、会議のあり方について「出席理事の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長の決すところによる」から「理事の全会一致により決すものとする」に改めることで了承された。



自治会館管理組合2階の特別会議室にて

### H33年を見据えた議論を

7月15日、6市町長会議が南部総合福祉センターで開催された。短期スケジュールについては、糸豊清掃組合が導入するストーカ式直結溶融炉の平成23年度稼動と東部、島尻清掃の焼却残渣問題に意見交換がなされた。

平成22年頃に基幹改良時期になる島尻施設は、莫大な経費もさることながら、ごみ処理の効率化を考えると、施設の閉鎖も視野に入れた広域での連携を求める声があがった。

長期スケジュールについては、糸豊、東部、島尻施設それぞれに基幹改良の時期に多少の幅が予想されることから、サザン協の一元化施設は13年後の平成33年頃の状況を見越しながら議論を行っていくことが確認された。



南部総合福祉センターにて

### 正副会長会議開催

7月9日、サザン協の正副会長会議が南部総合福祉センターで開催された。

冒頭、6月2日の理事会で指摘があつた決算剰余金については、新たに編成されたサザン協の新年度予算に組み込む報告がなされた。

この日は、サザン協会則の一部改正について、事務局連絡会運営規程の改正、補正予算について話し合われた。

平成20年度の補正予算については445.9万円を増額する案が提出された。また、広報誌の豊見城市配布分に係る折り込み手数料の予算化について指摘があり、是正する方向で豊見城市と協議していくことになった。この日提案された内容は7月18日の理事会に諮られることとなる。



南部総合福祉センターにて

## 地域の偉人

### 自由民権運動の父

### 義人 謝花 昇



八重瀬町(旧東風平町)が誇る偉大な人物謝花昇は、明治中期の沖縄の新しいうねりの中、沖縄の為に尽くした人で、自由民権運動の父、沖縄解放の先駆者義人謝花昇として町民の最も尊敬する人物である。今回の人物編では謝花昇を3回連載で紹介する。第2回目は「昇の幼少期と学業③」について紹介。

### 「昇の幼少期と学業③」

その後、明治18年の6月学習院を中退し、東京山林学校(後に東京農林学校、明治23年帝国農科大学に変わる。現在の東京大学農学部の前身である)に入学した。百姓出身の昇が農学の道を選んだことはごく自然なことかも知れないが、旧藩時代の土地制度や

浦崎榮徳氏(町史編纂委員)

一九四七年生まれ、八重瀬町世名城出身。〇八年に八重瀬町役場を退職し、現在、同町史誌編纂に携わる。在職中は、旧東風平町で同町出身の謝花昇研究に関わる傍ら、町立歴史資料館の建設に奔走。旧具志頭と合併する〇八年まで館長を務める。

旧慣温存主義等による農民の貧困など、農業のあり方に強い関心があつたからであろう。

東京山林学校から帝国農科大学へ進んだ昇は、林業や農業に関する研究を精力的に行い、卒業論文として取り組んだ「讃岐国糖業の実況及び其の改良」の研究は一級の論文として恩師の横井時敬博士や玉利喜造博士は称賛した。また、横井時敬博士は卒業に際し、彼を惜しんで「謝花は沖縄の謝花ではなく、日本の謝花である」と称賛し、東京に残って学界で飛躍することをすすめた。

昇も考えないこともなかったが、故郷沖縄の実情を考え、農学士として帰郷するのである。明治24年7月のことで彼が27歳の時であった。昇が明治15年の派遣留学から実に9年間も学問を修めたのである。昇が帰郷することを知った

故郷東風平の人々は、親戚、有志を中心にムシロ旗を立てて、那覇三重城の埠頭に出迎えた。

故郷に帰った昇は、多くの歓迎を受け彼が東京で9年に及ぶ学業や生活の様子を語ったそうである。人から人へ伝わり噂は噂を呼んで名声がたちまち県下を風靡したのである。(続)



謝花昇記念館の館内



東京遊学生の諸氏  
三列目左より一番目が謝花昇